

原始・古代船の推進具を考える(下)

～縄文～古墳時代の推進具集成～

江野道和(伊都国歴史博物館)

I はじめに

「原始・古代船の推進具を考える」の(上)では、研究史と櫂の分類、(中)では、出土した櫂(櫂状木製品を含む)・竿などの推進具の集成を行った。今回の(下)では、前2回分の資料を使って本稿のまとめを行いたい。

II 分類方針

(1) 分類と方法

櫂の形状および長さの違いについては、大きくわけて使用方法、地域、時期などの要因が影響を与えていると考えられる。まず、使用方法については、推進力を与えるべき船の形状と大きさ、果たすべき役割(推進用、舵用など)が考えられ、地域性については、湖沼や内海などの波の穏やかな場所、流れの速い河川、波の荒い外海など、時期については縄文から古墳時代にかけて、形状の差や装飾の有無がみられるかなどがあげられる。ここではまず、形状について時代的に分類を行い、つづいて使用方法や地域、時期の差について言及していきたい。

(2) 形状の分類

【方形・長方形】(第1図)

水かきの平面形態が方形～長方形を呈する櫂を選別し、時代別および地域別に分類した(『紀要』3号「原始・古代の推進具(上)」P17の分類では、水かきの平面形状G-a～b'に相当する)。まず、形状について大きく4種類に分類した。長方形で肩が張り、角が円いタイプ(★)、続いて、肩部がナデ肩で、水かきの先端部が直線に近いもの(■)、幅に対して長さがあり、長大となるもの(◆)などがあり、これ以外の★のものより円みをもつものや台形に近いものについてはその他としてまとめた(▲)。

時代別にみると、縄文時代には、★が主に山陰から琵琶湖周辺にかけて分布し、◆は琵琶湖周辺から北陸で出土する。このうち、★に属する島根大学構内(468・469)と夫手(479～482)の出土品は大きさに差があるものの、肩部と先端部の形状

が類似し、柄と水かきの軸線が偏る(E-b)などの共通点がみられる。また、琵琶湖周辺で出土する◆のうち、元水茎(401)、松原内湖(385)、入江内湖(220)においても形状などに共通点がみられる。

つづいて弥生時代に入ると、■が北部九州に集中し、東海付近にまで広がりをみせるとともに、長大形でナデ肩のもの(506・509)や肩の張るもの(185)、先端部が広がり台形状を呈するもの(64・210)も散見できる。このうち、■をつけたものでは、福岡県の長行でまとまって11本が出土しており(510～513・517・519)、峠で形状が酷似するものが発見されている(521)。また、拾六町ツイジ(508)や岡山県南方(492)、古墳時代の夜臼・三代(524)などは、肩部の形状と柄と水かきの軸線が偏る(E-b)などの共通点がみられる。

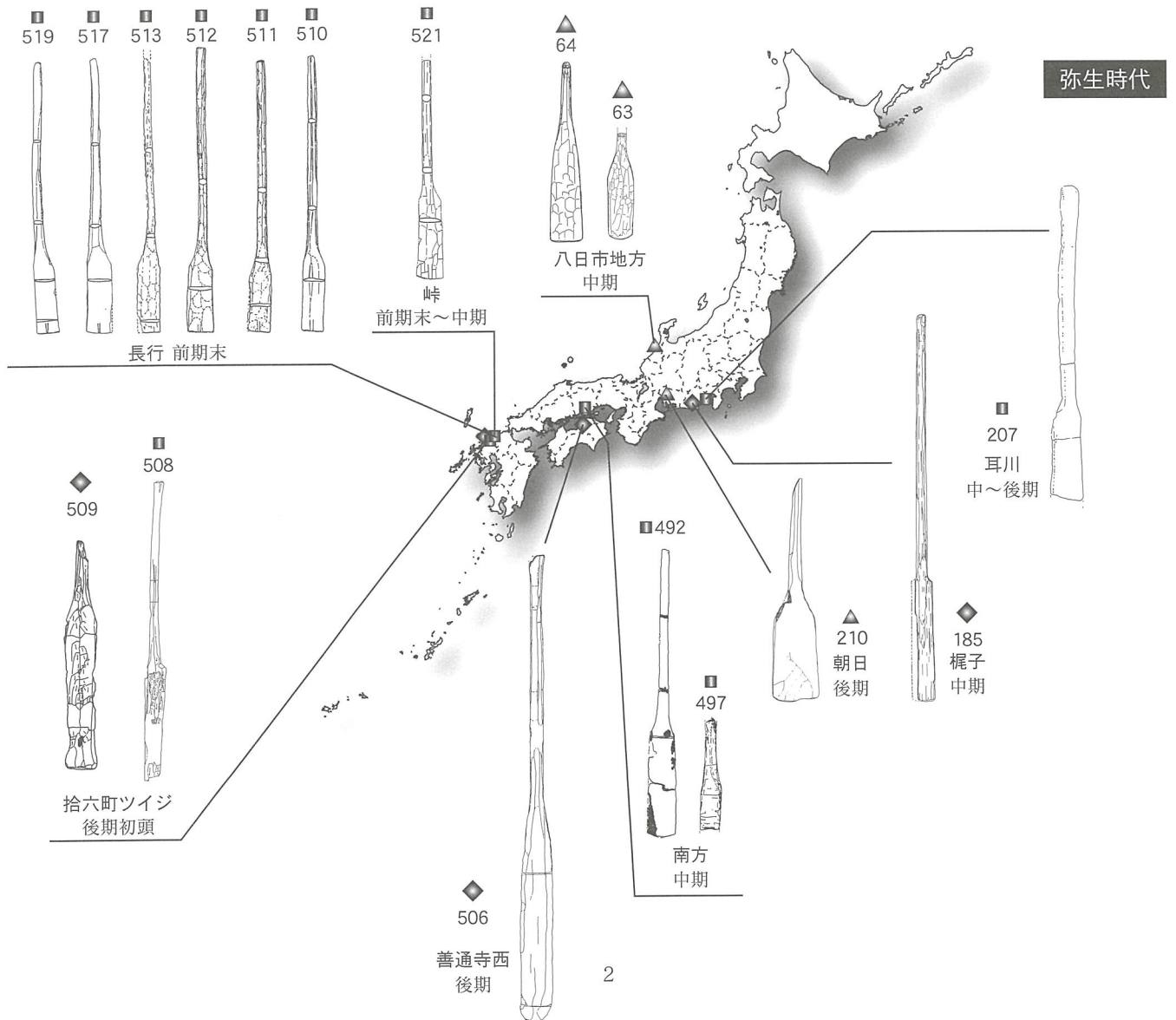
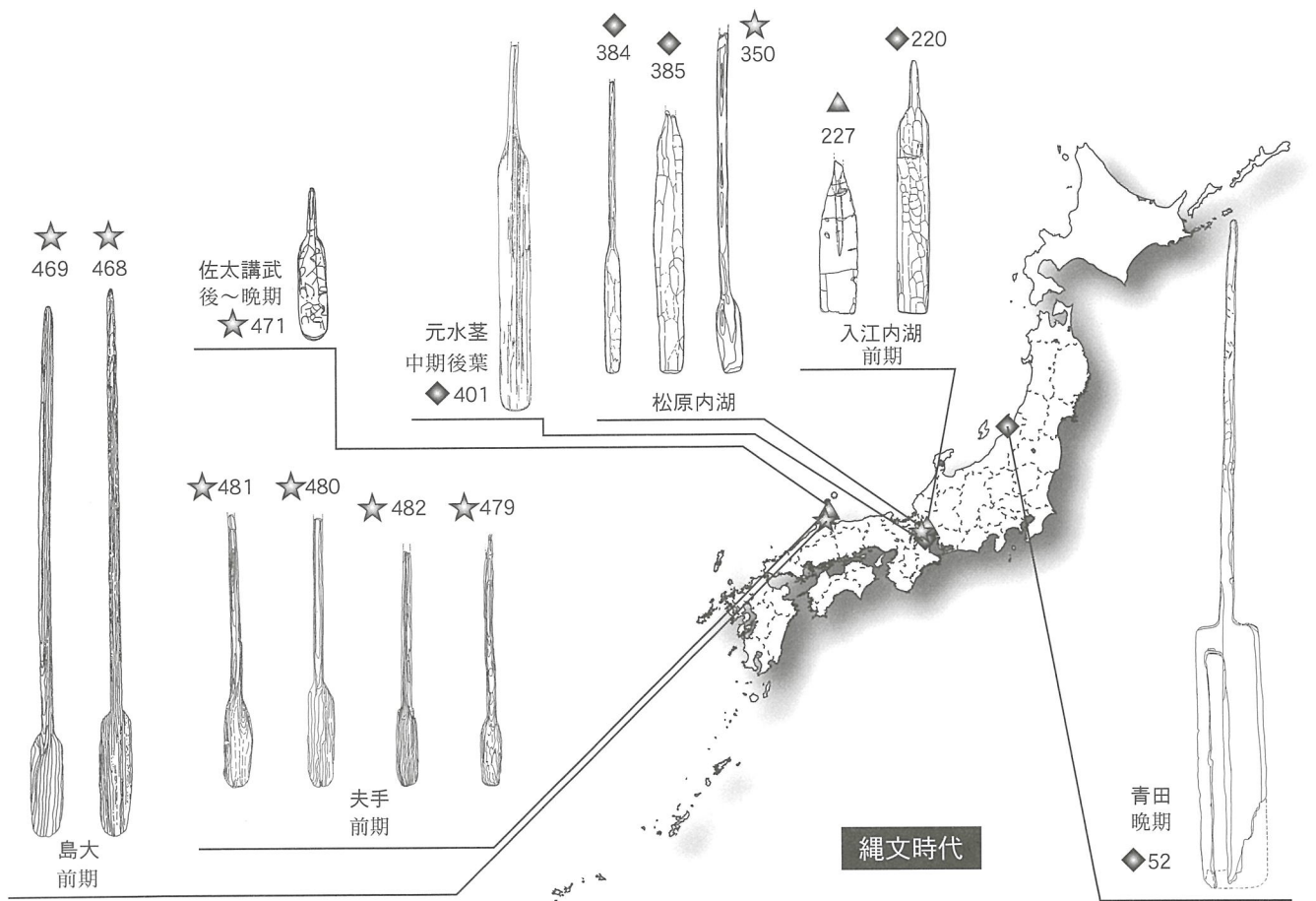
最後に古墳時代についてみると、長大形の中でも特に大きなものが出現する。兵庫県の中長越(435)では全長245.2cm、宮城県の中在家南(9)では全長260.4cmを測る。また、縄文～弥生時代にみられた円みをもつもの(420)や台形状のもの(58)なども引き続きみられる。

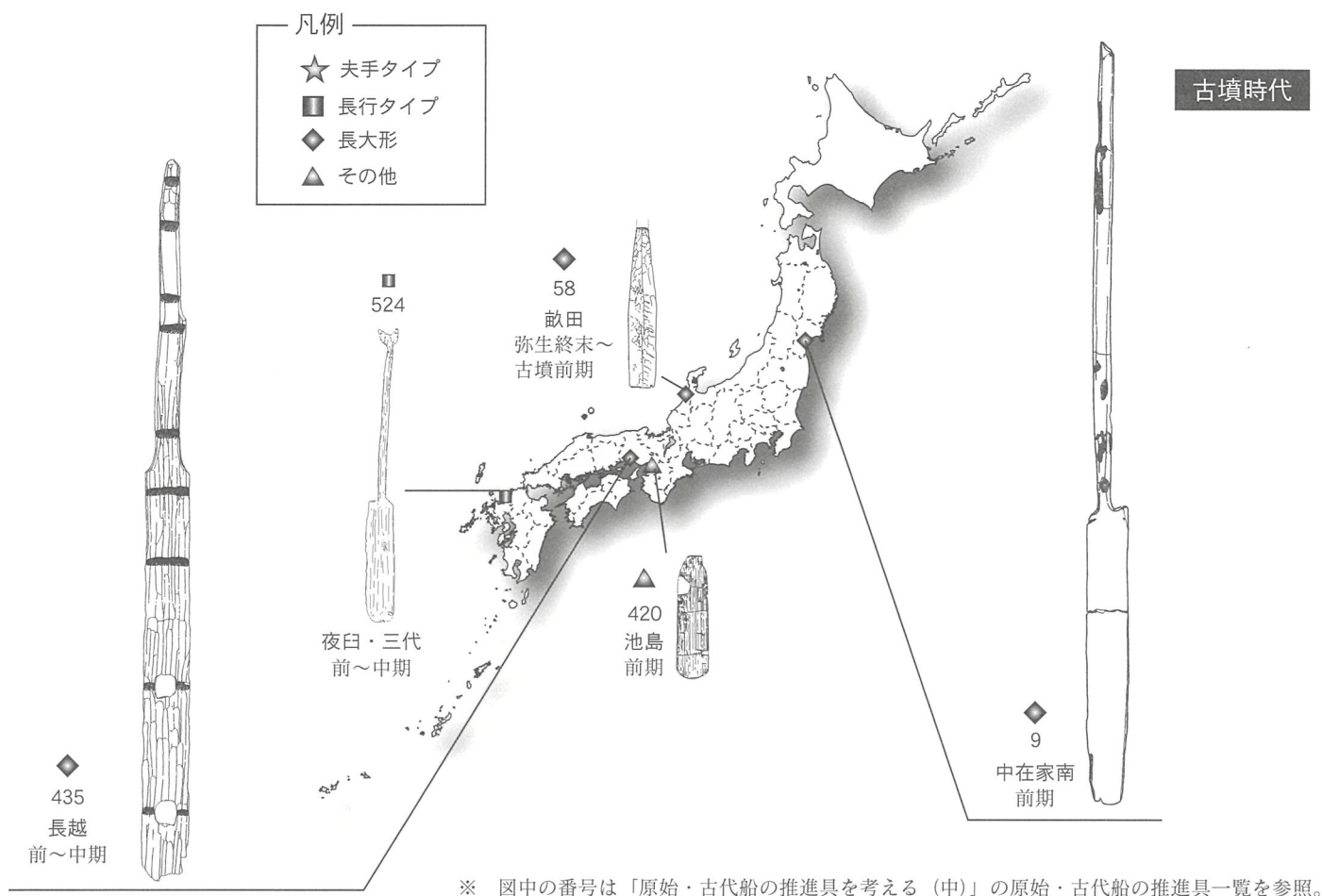
【長方形・楕円形・三角形】(第2図)

ここでは、第1図の「方形・長方形」と第3図の「楕円形・三角形」の中間に位置する形態で、狭長な櫂を選んだ。水かきの平面形状の分類においては、長方形(b・b')、楕円形(c)、三角形(e')の範囲に含まれる。

各時代別にみていくと、縄文時代には鳥浜貝塚(124・125)や松原内湖(388)で幅が狭い楕円形を呈し、最大幅が先端部寄りのものが出土している。また、角江(178)では、水かきの先端が尖り、柄が偏ったものが出土しており、弥生時代の南方(499)などに類似する。また、偏りがあるものの、水かきの長さが少し短い例として、佐賀県の東名(526)や福島県荒屋敷(20)などが挙げられる。

続く弥生時代に入ると、狭長な楕円形と先端が尖るものが広く分布するようになる。まず、前者については瀬戸内海～東海地方にかけて分布し、角江





第1図 方形・長方形の水かきをもつ櫂の分布

(160・173～175)や梶子(187・189)、西岩田(415)、鬼虎川(418)などがある。また、時期は弥生～古墳時代へと跨るが、福岡県の金山や雛川、島根県のタテチョウなどでも出土例があり、分布範囲がさらに広がる可能性がある。

次に、後者の先端が尖るものについては、四国～東海地方へかけて分布しており、善通寺西(505)や南方(499)、西岩田(414)などで出土する楕円形に近く、先端が尖るものと、梶子(190～192)のように側面が直線的に延び、先端が鋭く尖るものと、大きく2種類に分けることができる。また、善通寺西(505)と梶子(190～192)の中間の形態として下郡桑苗例(529)が挙げられ、縄文時代の松原内湖例(386)にも類似する。このほか、水かきの幅が著しく狭い長方形を呈し、柄との境界が明瞭でないものが津島(500)や日暮・松林(503)などで出土する。

最後に古墳時代に入ると、前時代の角江でみた楕円形のものが引き続き使われており、琵琶湖周辺から東海地方にかけてみられ、入江内湖(234・236)や松原内湖(364)、伊場(179)、山ノ花(196)などで出土する。また、先の尖るものも下田(426)、市川橋(13)などに引き継がれ、幅が著し

く狭く長方形を呈するものも袴狭(434)や山ノ花(198・199・201)などでみられる。このほか、先端が尖るものは、静岡県の大谷川や時期決定は難しいものの、大阪府五反島例などがある。

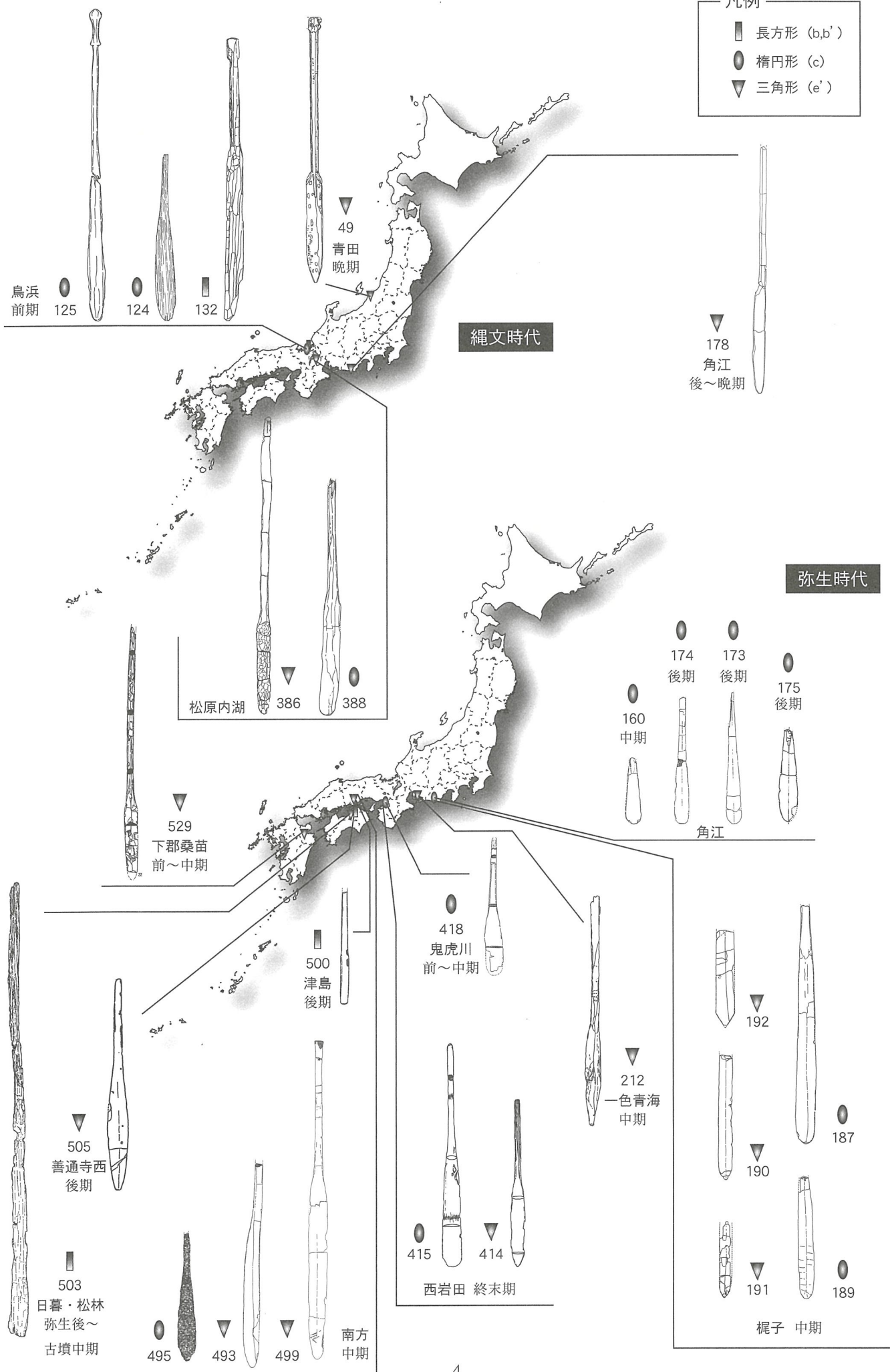
【楕円形・三角形】(第3図)

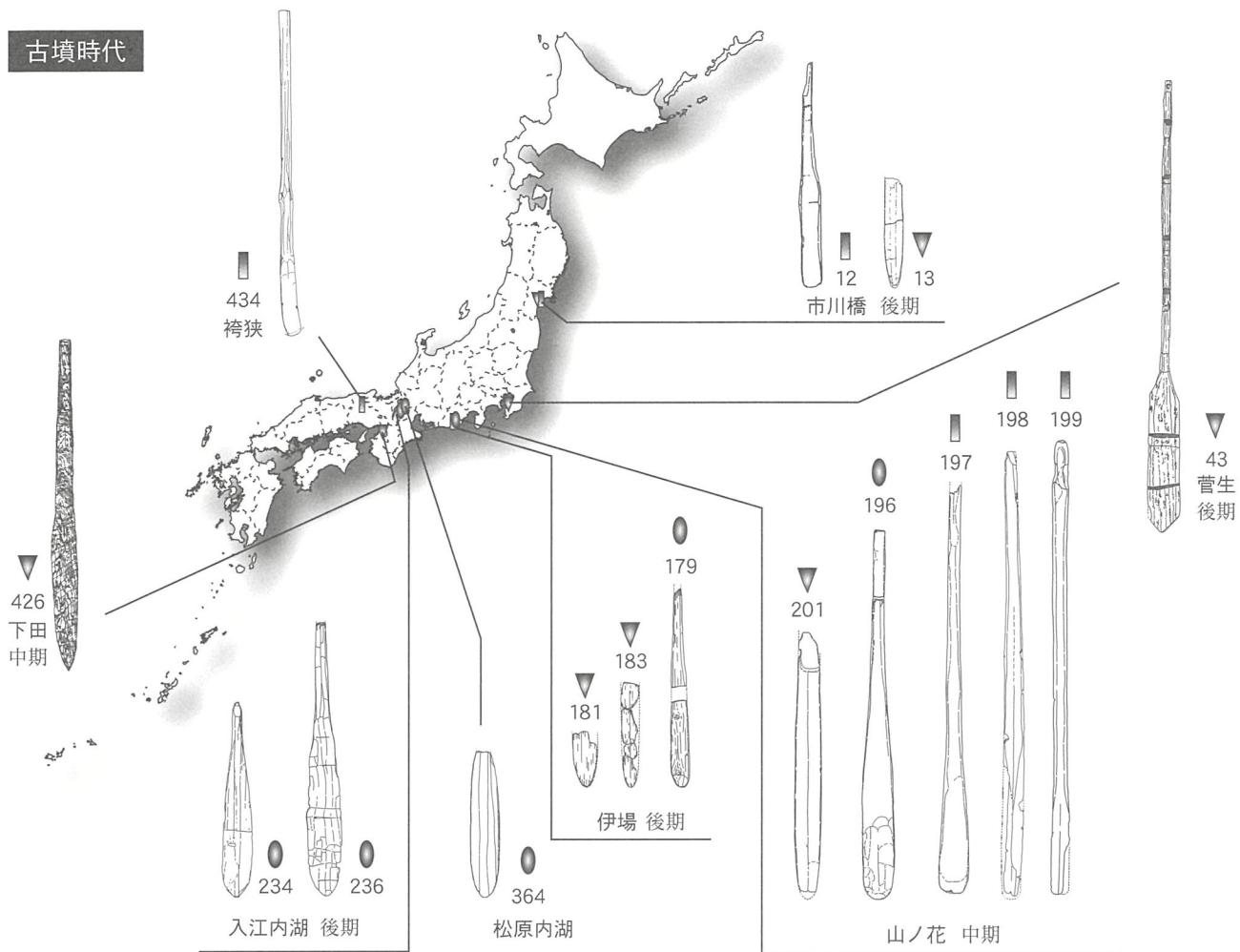
ここでは、水かきの平面形が楕円形(c')や三角形(e)をもつ櫂の分布をみていく。まず、時代別にみると、縄文時代においては、日本海側の新潟～福井県にかけて三角形の水かきが分布し、鳥浜(76)や青田(51)などで出土する。また、円形のもの、北海道と滋賀県の琵琶湖周辺でみられ、このうち、松原内湖例はやや角張った円形となる(389～391)。

続く弥生時代に入ると、稗田(477・478)で先端が鋭く尖った櫂が出土しており、古墳時代の五反分配りに酷似する。また、瀬名川(150)や角江(153・168)では、ややくびれた形の三角形となる。縄文時代の石狩紅葉山(1)でみられた、ナデ肩の円形水かきについては、北陸～近畿にかけて分布し、江跨(136)や高宮八丁(422)、鬼虎川(416)、池上(428)などでみられ、古墳時代の大谷川(145)に類例があり、石川県の三引(67)では先

凡例

- 長方形 (b,b')
- 橢円形 (c)
- 三角形 (e')





第2図 長方形 (b・b')・楕円形 (c)・三角形 (e') の水かきをもつ櫓の分布

端がやや尖る櫓が出土している。このほか、北陸～山陰にかけての日本海側では、円形に近い水かき^{註2}が出土しており、八日市地方 (62)、青谷上寺地 (第4図443・444) でみられ、古墳時代に入ると五反配 (第4図490) などに類例がある。

(3) 櫓の装飾について (第4図)

櫓へ装飾を施す個所としては、握り手である撞木とその周辺、水かき部分があり、ここでは、それぞれについてみていきたい。

まず、縄文時代をみると、北陸から山陰にかけての日本海側と千葉県において、いわゆる軍配形や羽子板状^{註3}と呼ばれる撞木が分布する。まず、北陸では、青田 (49)、真脇 (70)、鳥浜 (83・71・125・126) があり、関東では旧新田 (31) がある。大きく分けると、高さが低く、頭部を平坦に作り出すもの (49・126)、高さがやや高目となるもの (70・71・83・125)、角張るもの (31) とにわけられる。

弥生時代に入ると、山陰から北陸、琵琶湖周辺、東北地方にかけて方形状のものやT字状になるもの

のがみられる。江跨 (137) や中在家南 (10) では前者の方形状のものが出土しており、このうち、中在家南例では左右がややくびれており、縄文時代の軍配形に通じる可能性がある。また、稗田 (478) では、柄との境がなだらかで、明瞭な方形状を呈しないものの、頭部および側面の形状をみると、江跨に類似するといえる。また、後者のT字状のものは、赤野井湾 (258) などでみられる。

古墳時代には、袴狭 (433) で、方形とT字の中間的な形態のものがみられ、五反配では、T字形が出土している。注目されるのは北部九州の夜臼・三代 (524) で、尾鰭らしき形態となっている。握りやすさを追求した実用的な形態であるとともに、尾鰭に似せていることから豊漁を祈る祭祀の場で使われた可能性も考えられる。時期と地域差はあるが、弥生時代の青谷上寺地出土 (444) の水かきに描かれたサメと思われる線刻や古墳時代の五反配例 (490) に描かれた魚と思われる線刻などと共通するところがあるのかもしれない。

以上述べてきたとおり、櫓に伴う装飾は、土器な

縄文時代

凡例

● 楕円形 (c')

▼ 三角形 (e)

76
鳥浜
前期

51
青田
晩期

1
石狩紅葉山
中期

松原内湖

389 390 391

後期

62
八日市地方
中期

江跨 終末期

150
瀬名川
中期

弥生時代

430
432

袴狭 後期

477

稗田 中期

478

高宮八丁
前～中期

416
鬼虎川
前～中期

153
角江
中期

158
角江
中期

168
角江
後期

428
池上
中期

422
高宮八丁
前期

古墳時代

五反配
前期

145
大谷川

第3図 楕円形 (c')・三角形 (e) の水かきをもつ櫓の分布

どの資料と同様、例外は認められるものの、縄文時代に多く施される傾向にあり、弥生・古墳と時代を下るに従って失われ、方形やT字形、握り部をやや太くしたもの（南方例－499、大谷川例－145）が一般的となっていく。

（4）描かれた櫓と櫓状木製品の関係（第5図）

弥生時代から古墳時代には、船を象った絵画が土器や木製品を中心に、青銅器、横穴式石室、横穴などに描かれる。この船の絵の中には、櫓が描かれているものもあり、櫓の使用方法や漕ぎ手の数、船の大きさなどを知る上で重要な手掛かりとなっている。ここでは描かれた櫓と櫓状木製品との比較を行うこととしたい。

まず、絵画の櫓をみると（第5図上）水かきの中央部に線を描くものと、線のないもの（唐古・鍵②）とに分かれることがわかる。これについては、櫓状木製品のうち、水かき部に柄の延長部の削り出しを持つもの（第5図下）と共通することについて、本稿の（上）ですでに述べた。したがって、ここでは、他の要因についてみていきたい。最初に分布状況と時代とをみていくと、絵画との共通点がみられる櫓状木製品の分布は、九州から東北地方までみられ、時代も、縄文時代後期から弥生時代までの長い期間存続していることがわかる。木製品の性格上、腐朽のため失われたものが多いことを考えると、全国的に使われた形態であったことがわかる。つづいて、平面形態について比較を行うと、吉田知史氏が木葉状と呼んだ中にも、形態差がみられることがわかる。稲吉角田の櫓の水かきは先が尖り、中軸線が中央ではなく、少しずれる。樽味高木では、左側の6本（A）は長楕円形で細いが、もともと右の櫓（B）は側面がややくびれ、先端が尖る。高井田横穴例では、右側の舳先で円形の櫓を持つ。これらを実際の櫓状木製品と比較すると、長楕円形で細いものが第2・3図の楕円形（c・c'）、くびれをもつものが第3図三角形（e'）のうち、くびれをもつもの（150・153・158・168）、円形のは第3・4図の楕円形（e'）のうち、円形に近いもの（62・443・444）などと共通することがわかる。また、唐古・鍵①の左端と清水谷①の右上では、他の櫓と比べ、一回り大きい長楕円形の櫓が描かれていることがわかる。いずれも、方向を定める舵櫓であった可能性があり、高井田横穴の鱧部分の櫓も同様の役割を持つと考えられる。

以上、絵画と木製品双方の櫓を比較してきたが、絵画には従来考えられているより、多様な種類の櫓が描かれている可能性が出てきた。これは、書き手が想像によって船や櫓を描いたのではなく、実際に船を見た経験のある人物が描いたからに他ならず、櫓以外の船体部分や装飾についても今後、出土資料との比較を通じて、細部にわたる検討を進めてゆく必要が感じられる。

Ⅲ まとめ

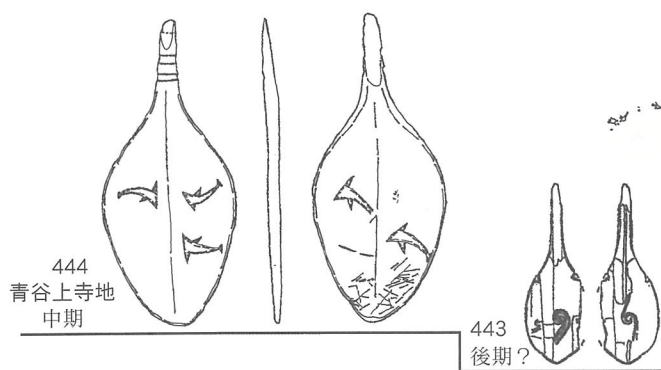
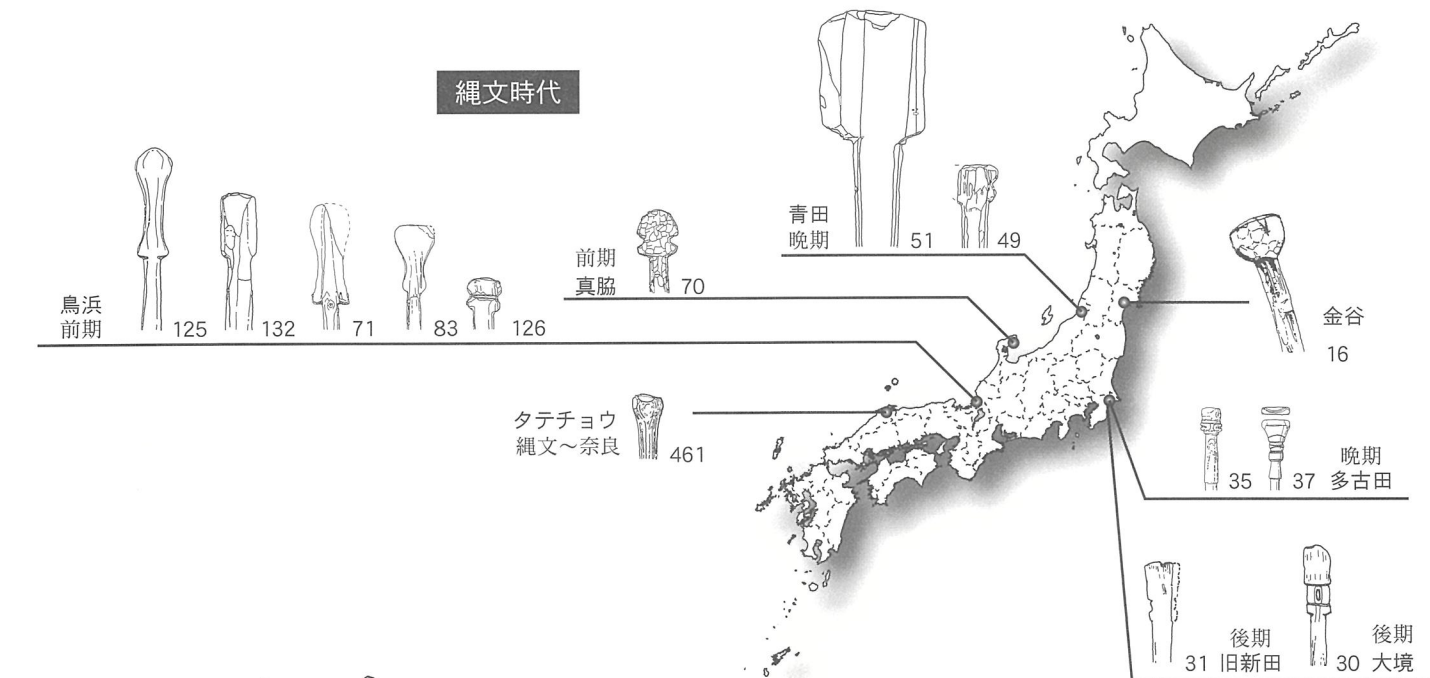
（1）櫓の形状と長さ、使用方法について

櫓の形状と長さについては、本稿の冒頭で述べたとおり、使用方法・地域・時期などと深く関係していると考えられる。まず、ここでは、形状の分類と分布結果を受けて、地域と時期についてみていきたい。

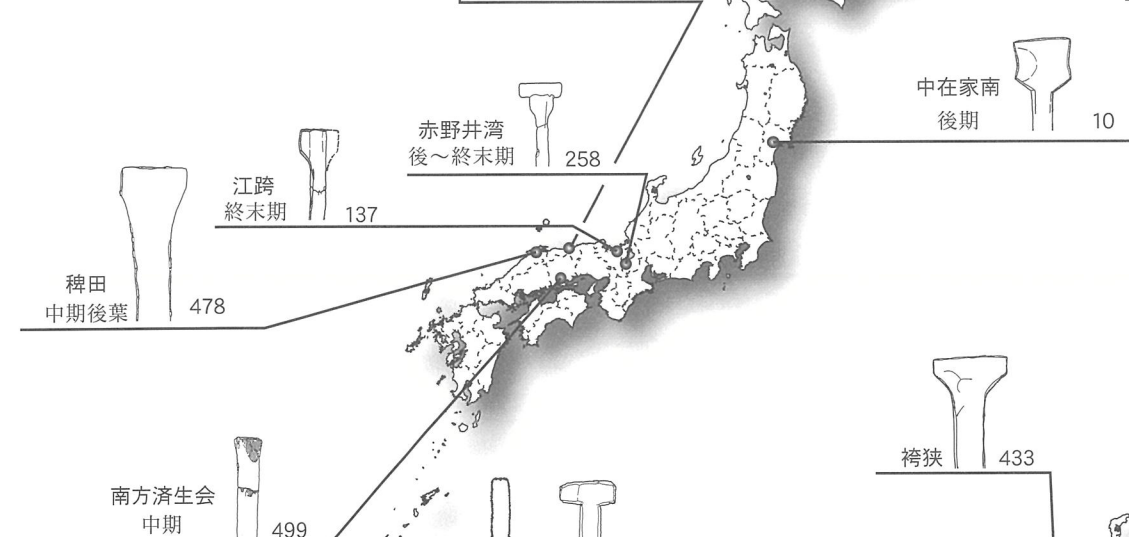
最初に、第1図に掲載した方形～長方形の水かきのうち、縄文時代をみると、大きく夫手タイプと長大形とにわけられる。夫手タイプは主に、島根県に集中し、水かき部に対して柄が長いところに特徴がある。出土地は、夫手と島根大学構内が島根半島の南岸に位置し、前者が中海、後者が中海および宍道湖に近い立地にある。また、佐太講武貝塚は島根半島の北部にあり、外海である日本海と内海である宍道湖の双方にほど近く、隠岐産の黒曜石をはじめ、九州や瀬戸内、朝鮮半島と関係の深い遺物が出土している。したがって、夫手タイプについては、波の荒い外海および静かな内海のいずれにおいても使用が可能であったと思われる。

これに対し、長大タイプは、琵琶湖周辺から北陸にかけて分布しており、このうち、琵琶湖周辺の元水茎・松原内湖・入江内湖の3つの遺跡からの出土品には強い共通性がみられる。水かき部が幅に対して著しく長い所に特徴があり、いずれも柄の部分が失われているため全長が明らかではないが、打櫓の一般的な長さから考えて、水かきの長さが全長の半分以上を占めているものと考えられる。琵琶湖周辺では、この長大な櫓と違うタイプの櫓も出土しているため、この形態が波の穏やかな湖特有の形とはいえ、使用方法から来た形態と考えられる。類例が少ないため、推測となるが、現段階では舵櫓の可能性を提示したい。これは、縄文時代にあつては極めて長い青田例（52）、島根大学例（468・469）などについても、同様の可能性が考えられる。

縄文時代



弥生時代

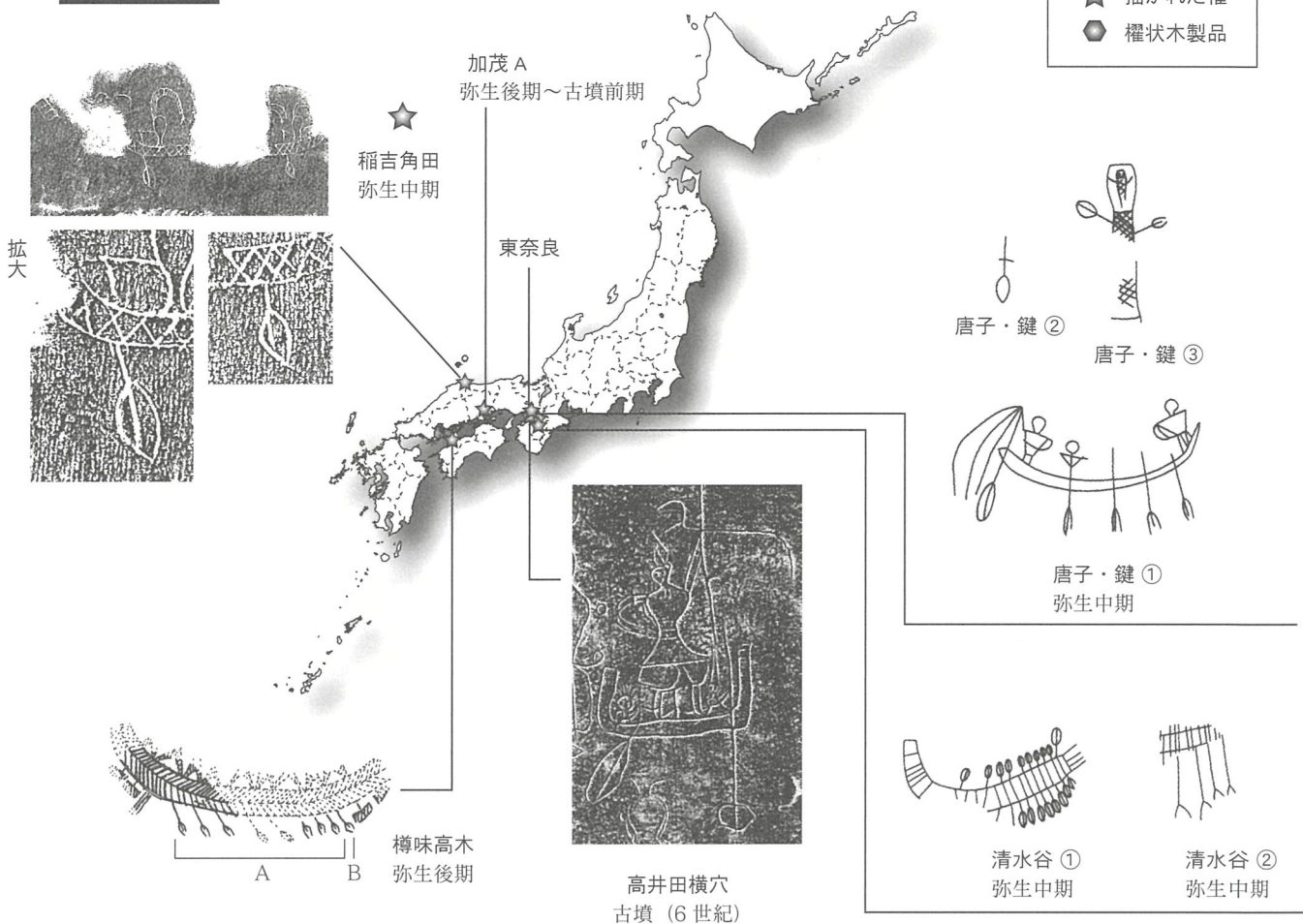


古墳時代

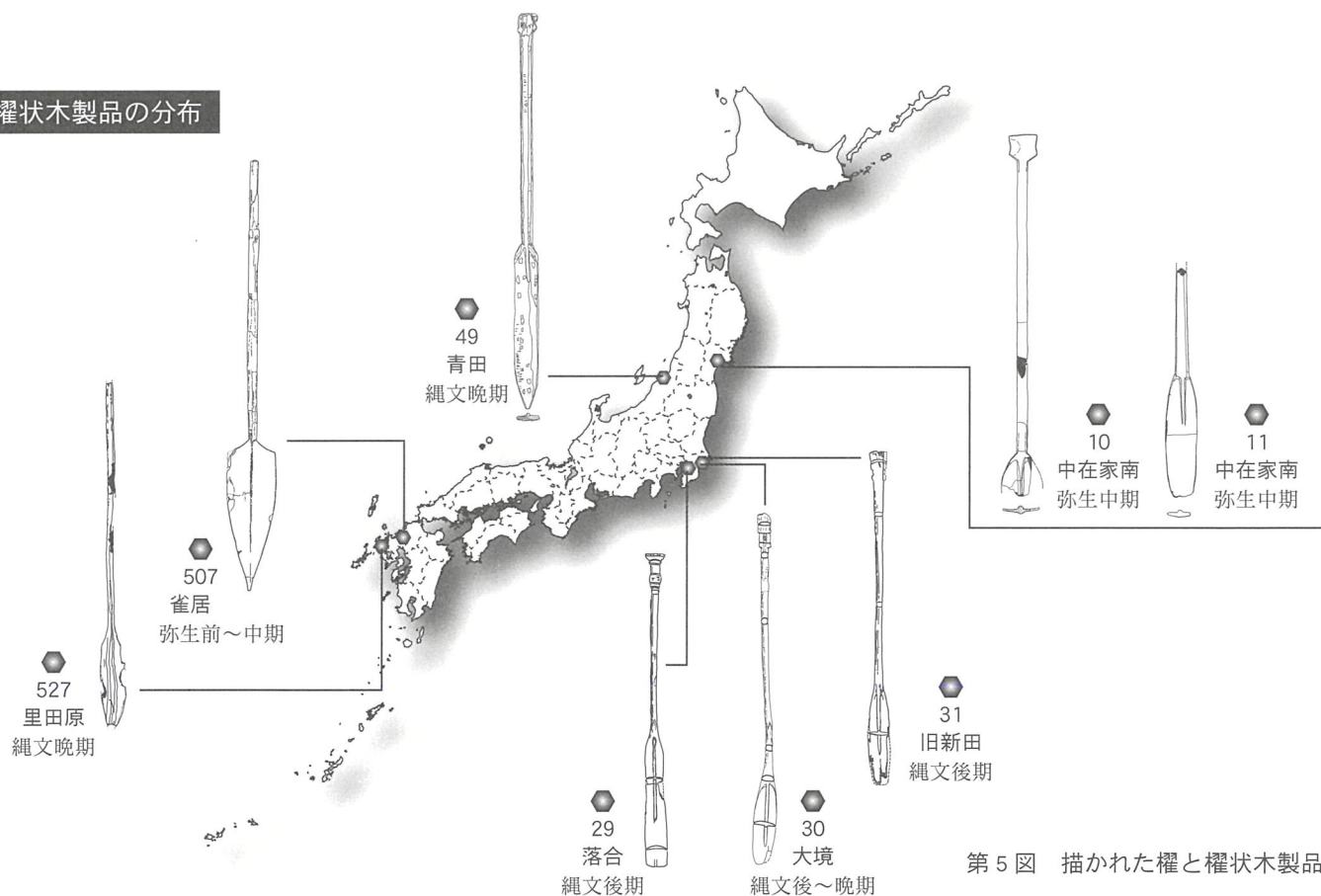
五反配 前期 490

第4図 撞木と水かきに線刻を施した櫓の分布

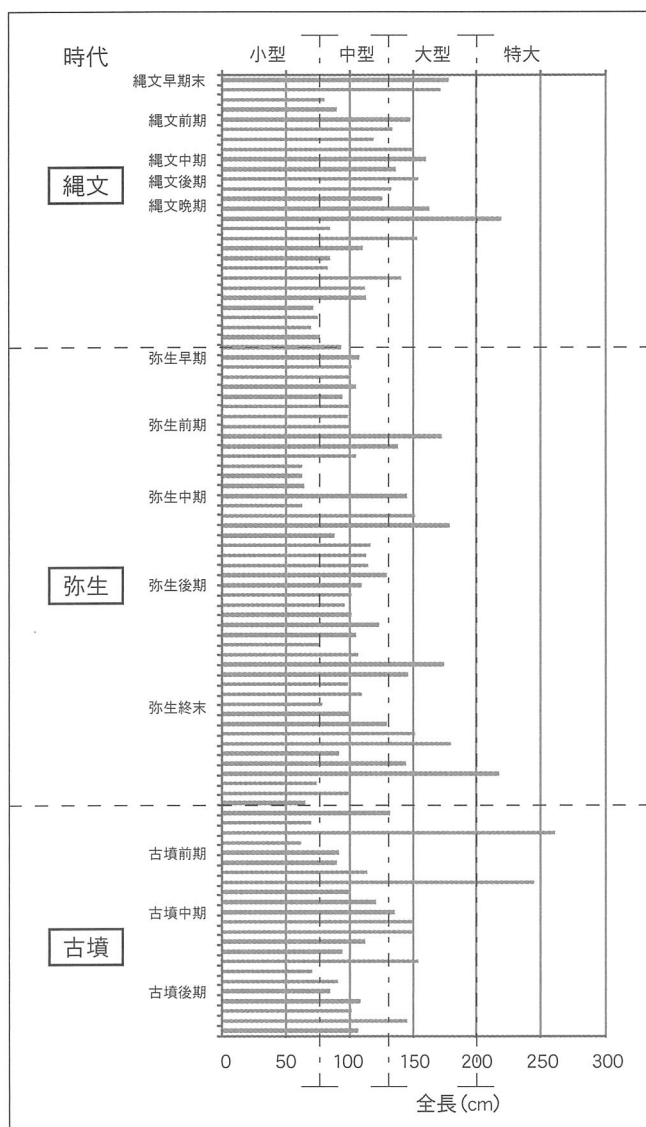
絵画の分布



櫓状木製品の分布



第5図 描かれた櫓と櫓状木製品



第6図 櫂状木製品の全長比較図

弥生時代に入ると、長行遺跡（以下、長行タイプ）に代表される櫂が北部九州に分布の中心をもち、瀬戸内海、東海地方まで広がる。長行タイプの出土した遺跡の立地環境をみると河川にほど近いものが多い。長行では、紫川が近くを流れ、拾六町ツイジでは室見川、善通寺西では弘田川の畔に立地する。したがって、流れのある河川での使用に適した櫂である可能性がある。

古墳時代になると極めて長大な水かきに太い柄を接続する櫂が出現する。長越例（435）、中在家南例（9）のいずれも、柄の途中に段を持ち、握りやすくなる工夫が施されている。このような形状は打櫂に適さず、長櫂としての使用に適しており、大型の船を推進させるための櫂として使用したものと考えられる。

つづいて第2図に掲載した長方形・楕円形・三

角形についてみていくと、いずれの形態も縄文～古墳時代にかけて存続することがわかるが、このうち、注目されるのは、三角形のうち、先端が特に尖っているものである。梶子（190～192）、一色青海（212）、下郡桑苗（529）などは、後背湿地または河川に面した場所にあるため、水位の比較的浅い場所での推進に際して、水底に突き刺し、竿のように使用することがあったと思われる。

最後に第3図の楕円形・三角形についてあげる。まず、楕円形のうち特徴的なのはほぼ円形に近い水かきであるが、日本海側の八日市地方（62）、青谷上寺地（443・444）などで特徴的にみられる。また、三角形の内、稗田（477・478）と五反配例は形態が類似し、静岡県内では瀬名川（150）、角江（153・168）などで、くびれのあるものが集中して出土する。

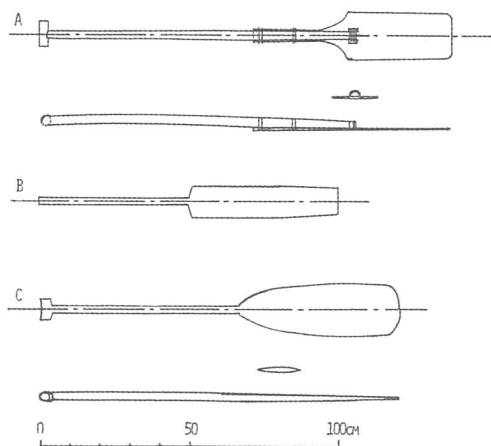
以上、みてきたように、夫手・長行両タイプやくびれのある三角形・ほぼ円形に近い楕円形など地域と時代を限り、特徴的な形態をもつものがみられる一方、全時代を通じて広範囲にみられるものの2種類があることがわかった。また、長櫂の初出例として現段階で古墳前期を捉えることができた。

(2) 船との対応関係

以上、櫂の形状と長さおよび使用方法の推定を行ってきたが、最後に推進すべき船との関係をみてゆき、終わりとしたい。

まず、縄文から古墳に至る船の大型化に伴う櫂の法量や使用方法の変化については、第1図で述べてきたとおり、長櫂と考えられるものが古墳前期に登場することから、少なくとも漕ぎ方に関する画期は当該期にみられる。しかしその一方、第6図の長さの比較表でみたとおり、櫂状木製品の多くは、縄文～古墳時代まで一貫して1m前後の中型で打櫂であることがわかる。したがって、船の構造は単材刳舟から木材を組み合わせた準構造船へと移り変わり、多くの人員が乗り込み、外洋を航海するための大型船が出現する一方、沿岸部や河川・湖沼で日常的に交易や漁労を行う船については、単材刳船、または小型の準構造船がその任を担っており、一貫して、打櫂による推進を行っていた可能性が高い。糸島市潤地頭給遺跡から出土した準構造船は、船の構造変化の過渡期にあつて、従来の推進方法を採用した船の一例といえる。

本稿により、従来は、櫂の形式について打櫂から



A ペーロン B サバニ C 南太平洋のカヌー

【図の引用】

柴田恵司・真野季弘・高山久明「手こぎ漁舟の研究－Ⅲ
ペーロンおよびその類似船の船型」『長崎大学水産学部
研究報告』45号（1978年）p35 Fig3 から引用。

第7図 現代に残る櫂の形状と長さ

順に長櫂、櫓と一元的に変化すると考えられてきたが、長櫂が登場した後も、打櫂による漕法が主体的に行われていたことがわかった。残念ながら、最後の櫓の初現期については出土資料の内に確実な資料を見出すことができなかったが、他の用途に分類されているか否かを含め、今後も引き続き注視していきたい。

（註）

註1) 櫂の番号は「原始・古代船の推進具を考える（中）」『伊都国歴史博物館紀要』4号（2009年）を参照。

註2) 山田芳和編『真脇遺跡』（能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団、1986年）では軍配状の頭部という用語を使い、類例として福井県鳥浜貝塚や埼玉県寿能遺跡の櫂を挙げている。

註3) 網谷克彦編『鳥浜貝塚研究1』（福井県立若狭歴史民俗資料館、1996年）では撞木を3種類に分類し、83を1類とし羽子板状、71と125を2類とし、1類を縦に伸張り、横に縮小した形態、126を3類とし、寸の詰まった8字形とする。

註4) 水かき部の突線は東日本における縄文後・晩期の特徴である。（新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団『青田遺跡』（2004年））

註5) 土器に描かれた櫂が木葉状を成すことから、形態の似た櫂を木の葉状の櫂と呼称した。分布域

は弥生中期では山陰から北陸にかけての日本海側で、後期以降になると、日本海沿岸諸地域で引き続きみられるほか、瀬戸内海周辺まで広がるとする。（吉田知史「善通寺西遺跡出土櫂の意義」『香川考古9号』（香川考古刊行会、2004年））

註6) 長崎・水俣・糸満・シンガポール・タイなどのペーロン船の櫂の長さは110cmから135cm。なお、ペーロン船の前後端に位置する漕手が持つ櫂は、他の櫂よりやや長い。（柴田恵司・高山久明「長崎ペーロンとその周辺」『海事史研究』38号（日本海事史学会、1982年）p38）

註7) 前原市教育委員会『潤地頭給遺跡』（2005年）